
最強の雷獣と落ちこぼれの魔獣使い

勝利 g

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

最強の雷獣と落ちこぼれの魔獣使い

【Nコード】

N9452Y

【作者名】

勝利g

【あらすじ】

魔法使いが魔獣使いに滅ぼされてから三百年。名家に生まれたのに魔獣に嫌われる主人公。だが、落ちこぼれと言われていた魔獣使いが最強の雷獣と契約！？ 学院一の優等生の秘密も知っちゃって？ いろんな障害を乗り越えて、無事卒業できるのか！？ バトル半分、ファンタジー半分です＞＜

一話（前書き）

誤字脱字がありましたらご指摘お願いします。

一話

魔法世界、レグアニア。

魔獣使いを育てるエンテイクスト学院――。

荘厳な、というより古臭いといったほうがあっている装飾が施された教室の中、春のぽかぽかとした日差しに当てられて、俺、ロスト・クレイグはまどろみの中にいた。
が、横から声かけられる。

「ロストくん！ 起きなつて！ 授業終わったよ？」

良く通るアルトボイスだ。

こんな声を出す知り合いは一人しかいない。俺はしぶしぶながらも意識を覚醒させ、首を声の主のほうに向ける。

ふわぁ…と大あくびをしてから、俺は口を開いた。

「なんか用か？ ルイス」

ちよつと垂れ目で人の良い同級生、ルイスは困ったように笑った。

「なんか用かって言われても、次は実技だから草原まで行かないと」

「あー…、ついにこの時がやってきてしまったか…」

俺はルイスの説明に深刻そうな表情を作って答える。

ほかの生徒にとってはたいしたことのない授業なのだろうが、俺にとっては大問題だ。

だが、その理由を説明する前に。

ここ、俺の通っているエンティクスト学院は三百年の歴史を誇る魔獣使いの学院だ。

魔獣使いについての説明をするには少し長くなってしまうが、歴史の授業の反芻だ。

レグアニアを三百年前まで支配していたのは、少数の魔法使い達だった。

強大な力を持ったそいつらは、魔法を使えない者たちを無力民と呼ばび、差別して圧政を行っていた。

しかし、一人の無力民の学者が、魔獣のすむ世界『エニグマ』への道『ゲート』を開いたことで世界は一変する。

無力民は魔獣と契約し、魔法使いに匹敵する力を手に入れ、自分たちのことを魔獣使いと呼んだ。これが魔獣使いの発祥である。

魔法使いと魔獣使い。力が同じなら勝つのは当然、数の多い魔獣使い。

『聖戦』と呼ばれたこの戦いで、魔法使いのほとんどは死に絶えることとなったが、魔法使いの王が最後の悪あがきに、己の命をすべて魔力に変換。

魔法生物『ルキア』を世界中に放ってしまう。

魔獣使いはルキアに対抗するために、ゲートの開いている場所に聖都ルミティアを建国。

魔獣使いを育てる学校『エンティクスト学院』を創った。

だが、俺はそのエンティクスト学院において、今現在《落ちこぼれ》のレッテルを貼られている。

それは俺の抱えている大問題の結果ともいえるべきものなのだ。

「と、とにかく行こうよ。このままじゃ遅刻するよ?」

「そうだな」

多少焦りの色を顔に浮かべたルイスの提案に俺は言葉と共に首肯した。

俺はルイスと連れ立って三年グリフォンクラスの教室を出る。それから大きな校舎の西側に建設されている魔獣の飼育施設『草原』へと向かった。

クラスは、『ガーゴイル』『グリフォン』『グレムリン』の三つ。魔獣と契約するために一年間も一緒に勉強して来たのだが、クラスメイトどもは俺とルイスを置いて先に行ってしまったらしい。薄情なやつらだ。

ルイス：、ルイス・エルンダートは入学式の時に俺の横に座っていたやつで、意外と話が合うためつるんでいる事が多い。ちなみに俺とルイスが十六歳で同じ年だと知ったときは驚いた。

早歩きで校舎の中を歩いていると、ルイスが話しかけてきた。

「そういえばさ、ロスト君」

「あんだよ？」

「ずっと前から気になってたんだけど……。その髪と目の色、おじいさん譲りって本当？」

俺の目つきの悪い眼球の色とそれを隠す髪。漆黒の髪に翡翠色の目は、確かにルイスの言うとおり祖父の遺伝である。

だが、それは俺にとってはコンプレックスにしかないので封殺する。

「んな話より、足動かさねーと本気で遅刻すんぜ？ ああ暴力教師に体罰食らうことになるぞー」

「えー！？ 今日の実技担当ってジルマス先生だったっけ？」

ジルマスとは、二つ名が体罰の鬼という毛深い筋肉の塊のような教

師だ。

それに本人の魔獣もゴリラのようなのだから笑えてくる。
首を縦にこくこくと何度も振って肯定の意思表示をすると、ルイスの顔が青ざめた。

「僕あの先生苦手なんだよ！」

早歩きから小走り、小走りから全力疾走へ。ルイスは一瞬で移行すると俺を置いて走り去ってしまった。
俺はその背中を見ながら一言。

「嘘だよ」

短くつぶやく。

今日の実技担当は生徒に甘いフローウエルだったはずだ。
俺は自分のペースを守りながら、悠々と草原へと向かった。

二話

「ひどいよロスト君！ 今日ではフローウェル先生じゃないか！」

草原へ授業開始の直前に到達した俺に開口一番、ルイスはそう言った。

俺は首をかしげながらルイスに言い返す。

「ちゃんと授業担任を確認してないお前が悪い」

「…………それはそうだけど」

ルイスは金髪で女のような顔、垂れ目、というような見た目どおり、気が弱い。

さっきも恐らく、自分が間違っているかも知れないという不安に駆られたんだろう。

確認してたのにクレイグ君が言い張るから！ と反論されたところで「人に流されるお前が悪い」とでも言えば済む話だ。

悔しそうにしているルイスは放っておいて、俺はクラスメイトの集まっている場所まで歩いていく。

ルイスも後ろからついてきて、俺の横に並んだ。

級友たちが集まっている円の中では、フローウェルが一匹の魔獣を檻から出しているところだった。教師による実演だ。

この学院の実技とは、実際に魔獣と触れ合うこと。

エニグマで自分のパートナーとなる魔獣を見つける前に本物——といっても人の魔獣から生まれたレグアニア育ちの魔獣だが——と触れ合わせることで、魔獣に対する扱い方などを学ばせようというの

だろう。

そして同時に、俺の抱える大問題とは実技の授業で必ず起こる――。

フローウエルの実演が始まる。

魔獣に己の生気を与え、その魔獣の武器『魔獣外装^{アーマメント}』を召喚する技術。

「まずは魔獣に生気を流すのです」

そういつてフローウエルは、赤い毛並みを持った犬のような魔獣『レッドハウンド』の子犬の額に手を当てる。

子犬は気持ちが悪そうにぶんぶんと勢い良く尻尾を振っていた。

「そして次は魔獣に向かって契約の言葉を唱えるのです。『魔獣外装^{アーマメント}』」

フローウエルの言葉を聴いた子犬の体から、光が滲み出して宙に浮かぶ。その光の塊は少しの間ふわふわと漂っていたが、やがて手を包み込むように覆った。光はどんどん収束していき、フローウエルの指には紅い指輪がはまっていた。

おお……！ と感嘆の言葉が生徒たちの口から漏れる。

フローウエルは、指輪を嵌めた手を空にかざした。

「これは魔獣が私から受け取った生気を魔獣外装に変換しているのです！ そして、こーんな小さな魔獣の魔獣外装でもこのようなことが出来るのです！」

先生の言葉が終わるか終わらないかのうちに指輪が強く発光、空中に向かって小さな火の玉が放たれる。

それは宙を少し飛んだかと思うと、ポンッ！ と可愛いらしい音を立てて、空中で破裂した。

フローウェルは立て続けにもう一発、火の玉を空に打ち上げる。

先ほどと同じように空中で破裂した花火を見上げながら、フローウェルは右手を高く掲げた。

生徒の視線がフローウェルの右手に集まる。

ピキピキピキッ！ パキヤーン！ と、指輪に亀裂が走り粉々に碎けた。破片は光の霧となって霧散する。

魔獣に与えた生気の分の魔力を消費し終えた、ということなのだろう。

ルイスは俺の隣でなにやら興奮している。大丈夫かコイツ…と内心で心配しているとルイスは急に俺のほうを振り向いた。

「どうした？ ルイス」

「魔獣外装かあ…、僕たちにも出来るかなあ…」

「お前はがんばりゃ何とかなるだろうよ。つーかこの授業三回目だし」

「そうだよねえ…、がんばらないと…」

一部分を強調した返しをしてやっているのに、ルイスは目をキラキラさせてフローウェルと子犬を見ている。

俺があきれた視線をルイスにぶつけていると、フローウェルが自分の植物のような魔獣『エスカドス』に命じて、いくつもの檻を持つてこさせていた。

「はい、皆さんには私と同じことをしてもらいます。二人一組になってください」

そう言われて、俺は右にいるルイスを見る。ルイスも同じことを考えていたようで俺と目が合った。

お互いに頷きあって二人一組は完成。他のやつらも各々ペアになっている。

ガシャリ！ と金属的な音を立ててレッドハウンドの子犬が入った檻が俺たちの目の前にも置かれた。

「それでは檻を開きますので、一人ずつ生気を与えてください」

その言葉を聞いて、俺はルイスに「先にやれ」と親指を立てて合図。ルイスは苦笑しながら檻に近づくと中から子犬を引っ張り出した。

「まずは生気の譲渡：だよな？」

ルイスは子犬の背に手を当てると、目を閉じて生気を渡し始める。触っている本人はすごく満足げだが、触られている子犬は不満なようだ。尻尾もまったく動いていない。

草原、という開放的な名前を持っているくせに、実態は檻に入れた獣の収容施設と同じで、ルイスも子犬が好きなくせに好きすぎて子犬に引かれるのだ。

このルイスの悩みは俺の抱える問題と似ているが、俺からしてみればうらやましい限りである。

そんなことを考えているうちに、必要量の生気を供給し終わったのだろう。

ルイスは一度俺と目を合わせてきた。見ていて欲しい、ということなのだろうか。

「じゃあ、始めるから…」

「がんばれー」

短く激励してやると、ルイスは頷いて目を閉じた。

集中して子犬と意識のやり取りをしているのだろう。第二世代の魔

獣だからこそ契約しなくても魔獣外装が使えるのだが、フローウエルのように簡単に魔獣外装を呼び出せるようになるには相当の修練が必要だ。

十秒間ほど目を閉じてから、ルイスはまぶたを持ち上げる。

二、三回深呼吸をしてから、一度大きく息を吸い込んで言葉を発した。

「『アーマメント魔獣外装』！」

魔獣外装を呼び出した。

子犬の体から光が溢れ出したあと、ルイスの右手に集まって指輪の形となる。

魔獣外装の召喚は成功したようだ。ルイスは興奮した面持ちで俺の方を向いた。

「成功だな」

「うん！　じゃあ次は火を撃ってみるね」

他のペアでも成功した組が何組かいるようだ。空中に向けてぽんぽんと火の玉が放たれている。

ルイスはさつき実演したフローウエルのまねをして、手を上に掲げ、意識を集中させた。

上に上げた右腕の手首を、左手で支える。するとポンッ！　と可愛い音がして、火の玉がルイスの手から射出された。

しかし次の瞬間、ボン！　と火の玉は一メートルほど進んだところで破裂。大きく広がった。

「んな！？」

「うわっ！」

火が俺とルイスの頭上を焼く。

なにしてんだ！ とルイスに文句を言いかけたのだが、悲劇はそれだけでは終わらなかった。

火の玉が爆ぜた次の瞬間、ルイスの指にはまっていた指輪が閃光を放って爆砕した。

その光はフローウエルの時とは違い、徐々に消えるのではなく一瞬だけで全ての光を放出。強烈な光が俺の視界を埋め尽くす。

これは『失敗』^{ファンブル}という魔獣外装に込められた生気が光に還ってしまいう現象だ。

「ご、ごめん…、失敗しちゃった…」

「失敗しちゃったじゃねーよ！ あぶねえだろうが馬鹿ルイス！！」

ぺこぺこと謝ってくるルイスの頭をはたきながら、俺は怒鳴りつけた。

失敗の規模^{ファンブル}によっては魔獣使いも危ないのだが、ルイスの指は無事だったようだ。

ルイスは恥ずかしそうに頭をかいて子犬を持ち上げると、ずいと俺に突き出してきた。

「じゃあ次はロスト君の番だね？」

「うっ…、いや、やっぱ俺はやめとく…」

「授業だよ？ やめておくとか無理なんじゃない？」

ぐ…、と俺は声を詰まらせる。

ルイスは子犬を俺の一メートルほど前に置いた。

ちょこん、とお座りをしている子犬に俺は、じりじりと近づいていく。

だが、俺があと二歩程度でたどり着く、という距離で子犬はビクッ！ と俺のことは見た。俺も動きを止めて、子犬と見つめあう。

その一秒後、プルプルと震えていた子犬が脱兎の勢いで俺と正反対の方向に駆け出していった。：犬のくせに脱兎の勢いとはどういうことだ。

「おい！ みんな見ろよ！ またロストが逃げられてるぜ！」

クラスのお調子者、ジャックが俺の醜態を指差して笑いやがる。他のクラスメイトどももそれに便乗して笑い声を上げていた。

このグリフォンクラスで俺のことを落ちこぼれと笑わないのはルイスだけである。

エンティクスト学院は二年生の学校だ。最初の一年で魔獣使いの基礎を学び、契約の儀で自らの魔獣を手に入れた後、一年の研修を経て正式な魔獣使いとして認知されるのだ。

閑話休題。

先ほどレッドハウンドの子犬に逃げられたように、魔獣に徹底的に避けられる。

これが俺の抱えている問題であり、落ちこぼれと言われる原因だ。魔獣使いは魔獣と心を通わせて戦う職業である。

それを育てるエンティクストにおいて魔獣に嫌われる俺は落ちこぼれなのだ。

実家のクレイグ家がルミティア建国の際に力を持った名家なので、その後押しがなければ入学さえ出来なかっただろう。

ため息をつきながら悔しげに他のクラスメイトを見回すと、フローウェルが近づいてきた。

エスカドスが逃げ出した子犬を捕まえている。

「クレイグ君…、相変わらず魔獣には好かれないんですねえ」

呆れたように苦笑いしながらフローウェルが話しかけてきた。
俺は、更に深いため息をついてフローウェルに同意する。

「一年間ずっと嫌われ続けてます…」

実際は生まれたときからなのだが。母親の魔獣すら俺には近づかなかったという逸話がある。生まれてきてから十六年間、魔獣と仲良く触れ合った経験は一度しかない。

俺の目と髪の遺伝の元である祖父の魔獣、ブラックドラゴンだけだ。さっきはルイスの質問を受け流したが、伝説の魔獣使いとまで言われた祖父と同じ容姿というのは落ちこぼれにとって相当なコンプレックスになるのだ。

かたや伝説、かたや落ちこぼれ、同じ見た目でもこうまで違うものなのか。

まあ、落ちこぼれとは呼ばれていても、いじめられているわけではないのが救いではあるが。

フローウェルはそんな俺をみて、にこやかに笑った。

薄桃色の髪をなびかせて、一言。

「評価は『D』^{最低}です♪」

いつもどおりの死刑宣告をしてやがってくれました。

三話

「そんじゃあロストの前期実技五十回連続の評価Dと全研修の終了を祝して、乾杯！」

「「「かんぱーい！」」」

「デメエらいつか見返してやるからな…」

食堂で、グリフォンクラスの生徒が打ち上げをしている。集まっているのは四十人ほど、ジャックの俺へのからかいを混ぜた乾杯に合わせて笑っている奴らに、俺は復讐を誓いながら呟いた。
ルイスも隣で笑っている。

「つーかおかしいだろーがお前ら！　なんで俺の評価Dが主体になっ
ってんだよ！」

「それはお前がエンティクスト史上初全五十回の実技をDで通った
からだろ？」

ジャックが楽しそうに笑って、テーブルの上におかれた鶏肉を切り分けて俺の皿によそってきた。俺はそれを貪りながらルイスに話しかける。

「契約の儀っていつだ？」

「あと四日…だったと思うけど。ペアどうなるか楽しみだね？」

契約の儀が終われば、あとは実習だ。エンティクストにおかれている魔獣使いギルドからクエストを受けて、魔法生物であるルキアを討伐するのだが、その際の保険として二人一組でペアを作るのだ。

要するに一人じゃ死ぬから二人でやれ、という学院側の要求だ。
そこで必要量の単位をとればエンティクスト学院から卒業することになる。

ルイスの言うペアとは、実技の授業で行う二人一組とは違って教師が決めるペアのことだ。

一年間で必要量の単位が取得できないと退学扱いになってしまうので皆ペア分けには必死になるのだが、ルイスはその重要さがわからないようだ。

「んなに能天気なくせに単位取れなかったら笑ってやるよ」

「笑わなくてもいいと思うんだけど…」

「嘆き悲しめと？」

「応援してくれればいいじゃん！」

「はいはい、単位取れなかったらな」

そんな感じで一時間ほどを過ごした後、テーブルの上にある料理を一通り皿に盛り付けると、俺は席を立った。

「クレイグ君、どうしたの？」

ジャックと楽しそうに談笑していた垂れ目で優しそうな女子——名前はレイアだったはず——が話しかけてくる。俺は皿を片手に、レイアに向かって空いているもう片方の手を上げた

「いや別に。部屋に帰って食べようかと思ってな」

「「えー！ 帰っちゃうの！？」」

なぜか俺の言葉にレイアとルイスが声をそろえて反応した。
俺は怪訝な顔をして、垂れ目な二人に聞き返す。

「なんか問題あるか？」

「せっかく皆がロスト君の連続Dを祝うためにパーティ開いてくれたのに！」

「そうだよー！ クレイグ君が主役なんだからー！」

「お前ら俺を笑いたいだけじゃねーのか！？」

息ぴったりに笑顔で人の心傷つけてくる天然コンビにツツコミを入れて、俺は食堂を後にした。

俺が食堂を出て向かった先は、学院の側に建てられている生徒寮だ。パーティを抜けてきたのは別にかかわれた事に気を悪くして、とかの理由ではなく、ただ単純に『契約の儀』という一生に一度あるかないかの大事な試験の勉強をするためだ。

実技の成績が最低な俺は筆記の方で点を稼がないと退学になってしまうため、今でも学年百五十人中で十番くらいには入っているのだが、寮に到着する直前となってエニグマについて書かれている本は自分の部屋には置いていなかったことを思い出す。

「……図書館行くか」

幸い図書館は生徒寮の近くにある。すぐに勉強できるようなという配慮だろう。

俺は寮の自室に飯を置いて、図書館へと向かった。

「相変わらず古臭いところだな……」

俺は重い檜の木で作られたアンティーク調の扉を見て、小さく呟い

た。

ギィ：と重い扉を押し開けて中に入る。

蔵書数は十一万冊と多いのか少ないのか良くわからない数の本が納められた本棚の間を縫うように歩いていき、エニグマ関連の本が収めである場所へと向かった。

しかし、

「あれ、アイツ…」

先客がいた。それも今まで何人もの優秀な魔獣使いを世に送り出してきたエンテイクスト学院で実技と筆記をともに一位をとり続け、史上最も優秀とまで言われる女。

同じグリフォンクラスに在籍しているセレン・アルジェだ。

きれいな顔の中にアメジスト色の瞳を持ち、透き通るような金髪を頭の後ろで結んで、もう十時ごろだというのに、まだ制服を着ている。

俺の目的の本が置かれている側の机の上に、大量の本を積み上げて何やら勉強をしている風だった。

だが、俺には関係ない。そう思ってアルジェの後ろの本棚に足を運ぶが、そこで俺は絶句する羽目になる。

なぜなら、俺が目的としていたエニグマ関連の本の部分だけが、本棚からごっそりと抜き取られていたからだ。俺はゆっくりと首を動かしてアルジェの机の上に置かれている本の山を確認する。

『エニグマノ全テ』 『エニグマとは』 『魔獣大全』 『エニグマ編』 『契約の義』 『魔獣の扱い方』 『魔獣外装解説』 『エニグマ地理』 etc…。

俺が借りようと思っていたエニグマ関係の本、その全てがそこにあった。

「……………おい、アルジェ」

声に微かな怒気を孕ませて、俺は目の前にいる優等生の名を呼んだ。だが、アルジェは気付いてないかのようにカリカリと羽ペンを動かしている。

俺は深いため息をつく、さっきよりも大きい声でもう一度話しかけた。

「あのよ！　ちょっといいか？」

だが、アルジェは全く反応しない。

「おい、セレン・アルジェー！」

その態度にイラついて三回目は話しかけるだけではなく、金髪の横に移動して、ダン！　と机を叩いた。

それでやっと気付いたかのように、アルジェは顔を上げると俺にアメジストのような瞳を向ける。

細い眉に大きな二重の瞳、鼻筋もよく通っていて、桃色の唇はふっくらとしているその顔に俺は図らずも一瞬だけ見とれてしまう。肌もキメ細やかですべすべしてそうだ。

「なに？」

アルジェは短く聞き返してきた。その視線で、勉強の邪魔をするなと暗に訴えてきている。

ここで、アルジェが気の強い自己中心的な女だと俺はようやく思い出した。

成績は良く、顔もいいのに、誰も寄せ付けない性格のせいでいつも一人のこの女のあだ名は確か『氷姫』。

ようやく反応してくれた氷姫様に俺は文句をつけた。

「一人でそんなに本を持ち出すのはどうかと思うんだが」

「だからなに？」

「図書館の利用規定にもあんだろ？ 一度に持ち出せる本は三冊までって」

「ここはまだ図書館の中、問題あるの？」

「は…？」

「だから、持ち出し規定は図書館外に持ち出す場合。私は別に違反してない」

声色を全く変えずに淡々と喋りきるアルジェ。

このままでは本を一冊も借りられそうにないので、俺は方法を変えることにした。

「お前の言い分は分かった。一つ質問なんだが、今勉強してんだよね？」

「そうだけど」

「なら、終わったやつあるだろ？ 俺も勉強したいから貸してくれ」

頭を下げた俺を、アルジェはまっすぐに見据える。

急に見つめられパチパチと瞬きをする俺に、アルジェは本の山から二冊取り出して俺の前に置いた。

「これ、私は読んだし…分かりやすかったから」
「え？」

あの氷姫がこんなに聞き分けがいいとは思わなかったため、間拔けな声で聞き返した俺だが、アルジェは再び羽ペンを持つと勉強を再開してしまった。

俺の前に置かれた本を手にとって見ると、背表紙には『エニグマ地

理』『契約の極意』と書かれている。

「今まで全く話さなかったけど、意外といい奴なんだな。ありがと
「ッ!？」」

俺が礼を言うと、アルジェの背がピクリと動いた。だが、特に返事をされる気もしなかったので、俺は本を抱えながら図書館を後にした。

だが、俺に礼を言われたアルジェが一瞬動きを止めたのはなぜだろうか。心なしか頬も赤くなっていたような気がする。首をひねりながら、俺は自室へと急いだ。

寮の玄関を通り、グリフォンクラスの男子居住区に戻ると、まずパーティーからくすねてきた料理をすぐにたいらげ、氷姫推薦の本を広げた。

最初は『エニグマ地理』からだ。

今日から契約の義までは授業はない。契約の義とは、よく体を休め、予習をし、万全の体制で臨むべきもの。そういう考えがエンティクストでは標準なのだ。

そう考えると聖戦の時の魔獣使いたちはすごいと思う。ぶっつけ本番でエニグマまで行ってパートナーとなる魔獣と契約してきたのだから。

頭の片隅で思考しながら、俺は本の中身を頭に叩き込んでいく。

まずはエニグマ全体の大まかな地理を、その次は各場所に生息する魔獣を。

本一冊の内容はかなりのもので、それらを全て覚え切ったところには

もう日にちが変わってから二時間が経っていた。
ルイスたちは食堂で眠ってしまったのだろう。帰ってきた気配はない。

「…もうこんな時間か。……………はあ…」

俺は壁にかけられた時計を見ながらため息をつく。

本を一冊覚えるのにこんなに時間がかかるとは思わなかった。だが、アルジェはこの本を読んだと言っていた。

今日は実技があったから図書館にこもっていたのは長くても九時間くらいだろう。それである本の山を築いたというのなら流石という他はない。

俺は眠気を吹き飛ばすように両頬をぺちぺちと叩くと、『契約の極意』を手を取った。

本のタイトルからして契約を成功させるために必要なことが書かれているはず。

俺は表紙をめくる。

そして、それを読み終わったときにはすでに朝日が昇っていた。

四話（前書き）

誤字脱字がありましたらご指摘お願いします^^

四話

結局一睡もせず夜を明かした俺は、談話室で椅子の背もたれに体を預けている。

すると、寮の入り口の扉が開き、グリフォンクラスの居住区にたくさん生徒がなだれ込んできた。

俺は驚いたが、そいつらの顔をみて苦笑いする。

昨日、食堂で騒いでいた奴らだったからだ。どうせ皆そろって眠ってしまい、朝の清掃に來た使用人に追い出されたのだろう。

「おはよう、ロスト君……」

徹夜明けで眠さを感じなくなっている俺に、死人の集まりのようなグループから出てきたルイスが話しかけてきた。ふらふらと足元もおぼつかない。

俺は立ち上がると倒れそうになったルイスを支えて、さっきまで俺が座っていた椅子に座らせた。

「ああ、おはよう。みんな揃って昨日は何をしてたんだ？」

「えっと……ジャック君がお酒の飲み比べしよーって……」

「理解した。よくがんばったな」

ジャックが全ての諸悪の根源なのだろう。

この前もそうだったのだ。こいつがどこから酒をくすねてきて皆に振舞ったのだ。皆が酔いつぶれるまで吞ませるくせに自分はどれだけ呑んでも酔わないのだから性質がわるい。

下手すれば酔いつぶれたあとも無理やり口に酒を注ぎこむのだ。

もう一度、死人グループを良く見てみると、ジャックだけは元氣そ

うにしている。

「ジャック。ちょっとこっち来い」

「？　なんだよロスぶおっ！！？」

のこのこと近づいてきた馬鹿^{ジャック}の鳩尾を蹴り上げて吹き飛ばしてから、俺は談話室の端にある水差しからコップに水を注ぐと、それをリュースに差し出した。

「ほら、飲め」

「うう…、ありがと…、うっぷ…！」

「吐くならトイレに行け！」

吐きそうになったルイスだが、なんとか堪えたようだ。

ゼーはーと息を荒くするルイスの背中を擦りながら予定を告げる。

「俺、図書館に本返してくるから」

「うん…、いつてらっしゃい…」

自室から『エニグマ地理』『契約の極意』を手に取り、まだ肌寒い季節なので、薄いが保温性の高い黒のロングコートを制服の上から羽織る。

クレイグ家の衣装棚に入っていたものなので結構な値打ち物だということは分かるが、他にもっと高価そうなのが並べられていたので持ってきてしまった。

ロングコートのポケットに本を無造作に突っ込んでから、俺は図書館へ向かった。

昨日の夜と同じように本棚の隙間を縫って、エニグマ関連の本が納められている場所へ向かう。
が、そこで今日二度目のため息をついた。

「こんなところで寝てるのかよ」

氷姫ことアルジェが、机の上に突っ伏してすやすやと眠っていたのだ。しかも本の山が昨日の二倍くらいの高さになっている。とりあえず、ロングコートから本を取り出して本棚にしまうと、熟睡しているアルジェを起こさないように本の山も片付けた。

同じグリフォンクラスだからな、別に寝顔が可愛かったからじゃないぞ！ と心の中で自分に言い訳をする。

「くしゅん！」

「うお！？」

アルジェのくしゃみに少し驚く俺。

いかに氷姫とはいえ、こんな暖炉もない図書館で寝ていたら風邪をひくだろう。

着ていたロングコートをぬぐと、ふぁさり…とアルジェにかけてやる。この恥ずかしい行為も俺がアルジェにコートを返せと言わなければ闇に葬られるはずだ。

「（本を貸してくれた礼だ…。意外とためになったしな）」

ひそひそと呟いて自虐的な笑みを浮かべる。

子供のように眠るアルジェだが、こんな優等生と落ちこぼれがもう関わることもないだろう。

俺はもう一度だけ氷姫…こうやって寝ているところだけ見ると眠り姫のようなアルジェの寝顔をちらりと見ると、寝なおすために寮へ

と戻った。

「あゝ…、ロストくゝん…」

「まだ二日酔いなのかよ…。俺はもう寝るから夜になったら起こしてくれ」

いまだに死人の雰囲気醸し出しているルイスに呆れた視線を向けると、俺は談話室のテーブルからクツキーを幾つか持って自室への階段を上る。

ポリポリとクツキーを全て胃に収めると、俺はベッドに倒れこんだ。今まで全く無かった眠気が急にまぶたを重くする。

ぷつん…と、糸が切れるように、俺は眠りの世界へと旅立った。

「ロスト君、ロスト君！」

「くぁ…ルイスか？」

俺は体を揺すられて起き上がると、大あくびをしてから自分を起こした人間の名を呼んだ。

二日酔いが治った気の良いクラスメイトは困ったように笑うと、俺の前に黒い布のカタマリのようなものを差し出してくる。

俺は訝しげにそれを眺めるが、次の瞬間。

「おわあ！？ 何でこれがここに！？」

ルイスが持っていたのは綺麗にたたまれた黒いロングコート。そう、俺がアルジェの肩にかけてやったはずの、あのロングコートだ。

それをルイスが持っているということは…。駄目だ、脳がその先を想像することを拒否している。

「アルジェさんからロスト君に返してくれって言われ――」

「黙れコラア！！！」

ベチンッ！ と俺が想像しなくなかった事実を一瞬で口にしやがった馬鹿の脳天を思いっきりはたくと、俺はロングコートを布団の下に突っ込んだ。

だが息を荒くする俺に、ルイスは更に追撃を開始する。

「いやあ、でも僕おどろいちゃったな。まさかロスト君がアルジェさんとあんな仲だったなんて」

「あんな仲ってなんだ！？」

「え？ あのロスト君が自分の着てるものを優しく差し出すような関係だよ？」

「誤解！！ つーか今日一日の記憶を全て失え！！！」

「男子寮の談話室にまで来てたから、皆もおどろいてたよ」

「あいつらも見えたのか！？」

「いままで教室でも誰とも話さなかったあの氷姫様をいつのまに落としたんだよ！ ってジャックくんが怒ってた。でも本当にいつ仲良くなったの？ あのアルジェさんと」

「落としてねえよ！ だいたい怒られる筋合いもねーし！ 仲良くもなっていない！」

「…まあ、いいや！ そろそろ食堂に行かないとご飯なくなっちゃうよ？」

「……………最初の間はなんなんだ」

いつもおとなしいルイスがこんなに過敏に反応してくると思わなかった。

というかアルジェはなんでロングコートが俺のだと分かったんだろう。

うーむ…と、本気で悩み始めた俺にルイスがポケットから何かを取り出して俺に差し出してきた。

「手紙？」

「うん。アルジェさんがロスト君に渡してくれて。あ！もちろん中身は見えないよ？」

「見てたら殺してる」

怪訝な顔をして俺は手紙を受け取った。白い封筒で、その厚みからして中身は一枚だろう。

俺はそれをどうするべきか少し逡巡した後、

「ルイス、ワリィンだけど俺の飯取ってきてくれないか？ お前が飯食った後でいいから」

食堂には行かないで手紙を読むことにする。

中身が気になるし、何より食堂に行ってジャックにでも会ったらアルジェとの関係について一晩中追求されかねない。まあ、あいつらの思ってることは全て誤解なのだが。

そんな俺の胸中を理解してくれたのか、ルイスは快く頷いてくれた。

「分かった。じゃあ一時間くらいでまたロスト君の部屋に来るから」
「ああ、頼む」

「この皿も持っていくね？」

そう言ってルイスは昨日の夕食を乗せていた皿を持って部屋から出て行ってくれた。

俺は、足音が聞こえなくなるのを確認してから、手に持った手紙に視線を落とす。

蠟で封をしてある。くるりと裏返すと綺麗な文字で「セレン・アルジェ」と綴られてあった。

「ラブレター…？ いやでもあの氷姫がんなことするわけねーか…」

一瞬だけ思春期特有の淡い期待を抱いてしまった俺だが、すぐに「それは無いな」と首を振った。あの氷姫がそんな可愛いことなにかした日には、空からファイアーボールが降ってくるのかと思ってしまう。

俺は部屋の机の引き出しを開けると、中からペーパーナイフを取り出した。

それをスツ…と蠟の下に滑らせて封を切ると、ゴクリ…と唾液を飲み込んでから便箋を開く。

俺は恐る恐る便箋に目を通し始めた。

——ロスト・クレイグ——

「いきなり呼び捨てかよ…、まあいいけど」

——外套を貸してくれたことと、本を仕舞ってくれたことに感謝する——

「…それだけかよっ!？」

書かれていたことはそれだけである。俺は脱力してベッドの上に倒れこんだ。

そして思いの外、自分が手紙に期待していたことに気付き失笑する。だが、ベッドの上でもう一度頭上に便箋を掲げたとき、その右隅に何か小さく書かれているのを見つけた。

――…一応言っておく。ありがとう――

ガバツ！ と俺は勢い良くベッドから起き上がってもう一度文面を確認するがその言葉は消えなかった。

俺は、あの氷姫でもお礼とか言うんだなーと地味に驚いたが、手紙をもう一度封筒に仕舞うと、引き出しの奥に入れておく。おそらくこの学院で初めてアルジェから手紙をもらったのだ。そのくらいしても罰は当たるまい。

いつのまにか無意識にニヤついてしまったが、俺は気を取り直すと時計を見る。

「まだルイスが帰ってくるまで四十分くらいあるな…」

仕方がないから図書館で物語でも借りてこよう。そう思って俺は自室を出た。

この時、俺がロングコートを羽織った理由はなんとなくである。決して、やましい気持ちなどではない。…ほんとだぞ！？

もちろん、図書館にアルジェがいるということは無かった。…少し期待していたけど。

四話（後書き）

感想など書いてくれると嬉しいです＜＜

閑話 聖戦

「あのさ…リク」

《なんだ？》

黒い髪と翡翠色の瞳を持つ一人の魔獣使いが、隣にいる巨大な獅子に話しかけた。

はぁ…と魔獣使いの青年はため息をつく。

「魔法使い五千人と魔獣使い二十万人の戦争でさ…、なんで俺一人で三千人を相手にしなくちゃいけないんだ？」

《百倍の数じゃねーと勝てねえって思ったんだろ？》

獅子が呆れたように答える。

青年と魔獣の目の前には大きな扉があった。扉の奥には魔道王とその側近が率いる三千人の魔法使いが待ち受けているだろう。

青年は更に嘆きながら獅子の体に手を当てる。

「大体…まだ魔獣使いは弱すぎだよな…。魔法使いに反乱起こせるレベルじゃないってのに焦りやがって…。俺がいないと話にもならないじゃねーか」

《…そろそろ乗り込まないと二千人が帰ってくるぜ？》

「これ以上増えられてたまるかッ！ リク！ 『魔獣外装』！」

半ばキレ気味に青年が叫ぶと獅子の体から光が滲み出し、青年の右手に収束して一本の刀が生み出された。

白銀の刀身に金色の模様が刻み込まれた美しい刀を青年は上段に構えると、扉に向かって無造作に振る。

次の瞬間。バチィッ！！　と刀から生み出された雷が扉を吹き飛ばした。

青年は獅子の背に飛び乗ると、刀を握る手に力を入れる。ヂヂヂヂヂヂッ！　と紫電の光が刀身に走りスパークした。

《盾はいらねーのか？》

「お前が防いでくれるって信じてるよ。『最強の雷獣』さん」

《クハハ！　任せろ『始まりの魔獣使い』！》

獅子の笑い声が空気を震わせた。獅子の後ろ足の筋肉が力を溜めて爆発的な加速を生み出す。扉を潜り抜けると奥は更地になっており、その青年一人を倒すために砦の一つをつぶしたことが察しられた。三千人の魔法使いが半円状に青年と獅子を囲む。

だが、青年はそれに臆した様子を見せない。それは獅子も同様で、止まるどころか更に加速して魔法使いの群れに突っ込んでいく。

「奴をここで仕留めねば我らの負けだ！　第一陣！　放て！」

指揮官らしき敵の男が空に炎球を撃つのと同時、千人ほどの魔法使いが一斉に攻撃魔法を打ち放つ。七色の光の奔流と見紛うばかりの様々な攻撃魔法は青年と獅子を粉微塵に変える――はずだった。

《邪魔だァ！》

獅子が吼える。契約者の青年以外にはただの鳴き声にしか聞こえない咆哮だが、それは畏怖を抱かせるには十分であった。

《『迎雷壁』！！》

バチチチ！！　と獅子の体から電撃が溢れ出し、全ての攻撃魔法を

迎撃した。光が幾つも炸裂し、当たり一面を光が埋め尽くす。

青年の視界も光が覆ったが、それに構わず青年は刀を横一文字に薙いだ。ヂチィッ！ 刀から雷が迸り、正面にいた魔法使いを一度に百人ほど消し炭に変える。

「まずは百人か…」

だが、青年の攻撃はそれだけでは終わらなかった。

刀を振り切った体勢から、今度は雷を纏った斬撃波を他の集団に叩き込む。空を切り裂いて飛んだ斬撃波は地面に着弾すると同時に雷の嵐を撒き散らし、着弾地点から周囲五十メートルほどの魔法使い全てを焼き尽くした。

「五百は逝ったかな？ これで——」

《六百！ 残りは二千四百！》

獅子は口を大きく開くと太い雷の矢を飛ばす。

狙いは周囲一面更地となっている中で唯一の高台。おそらくは魔道王がいる場所。

だが、どんな矢よりも速く雷速で飛んだその雷矢は、高台にぶち当たる直前に掻き消える。

それに獅子が驚愕の色を交えて呟いた。

《…オレの雷閃が消されたぞ？》

「多分魔道王の『左腕』シニストラだよ。もともと天才的に魔術の腕があるくせにその容量を全部防御に割り振った変わり者」

攻撃魔法は一切使えないけどな…と呟きながら魔法使いを消し飛ばし続け、青年は高台に目を向ける。

接近戦が得意ではない魔法使いが人海戦術を使う時点で負けは決ま

っているようなものだ。

だが、『^{シニストラ}左腕』の対となる攻撃魔法のエキスパート『^{デクストラ}右腕』に限ってそれは当てはまらないが。

獅子が魔法使いの集団に突っ込み、青年が消し飛ばす。それを三分ほど続けると魔法使いの数は千人ほどになっていた。

「残りは千か…」

《さっさと終わらせよーぜ！》

「ああ、そうだな！」

青年は獅子の言葉に合わせて、刀に纏わせる雷の量を十倍以上にする。残りの魔法使いは散り散りになっているため、その半分に照準を合わせ、刀に残った雷の力を五百等分して解き放つ。

刀から五百条の雷光が轟音とともに溢れ出し、五百人を一瞬で焼き殺した。

だが、力を全て解放した刀は砕け散って光と消える。

「魔道王がさっさと出てきてくれれば楽なんだけど」

「お前如きに王が出るまでもない」

「！！ リク！」

青年が呟くのに獅子が反応するより速く、青年の後ろでそれに答える者がいた。

すぐさま刀を再構築するが、背後の襲撃者のほうが一瞬早い。爆風が青年を獅子の上から弾き飛ばす。

その後、襲撃者は獅子にも攻撃を加えようとするが、獅子が体から全方位に放電したため慌てて飛び退る。

青年は空中でバランスをとってうまく着地し、襲撃者と向き直った。

「…へえ、驚いた。『^{デクストラ}右腕』って女だったのか」

青年の前にいたのは全身を黒布で包んだ背の高い女性だった。

獅子は青年の側に近づき、青年は獅子の背に飛び乗る。

驚いたと言いながらまるで驚いている素振りを見せない青年に、右腕は忌々しげに舌打ちした。

「よくも、高貴なる我が同胞の半数を：屠ってくれたな！」

「高貴？ それなら何故下賤なる血の平民に、こうも好きにやられるんですか？」

「黙れ！！ 魔道王の右腕エルド・マギクス・イレイナス！ 参る！」

「…ニード・クレイグ」

『始まりの魔獣使い』 & 『最強の雷獣』 VS 『魔道王の右腕』

三百年後には歴史の影に埋もれてしまう戦いが、今始まった。

轟！！ と巨大な炎球を『魔道王の右腕』エルドは『始まりの魔獣使い』ニードに叩き込もうとする。

だが、ニードは刀の一振りで炎球を吹き飛ばした。

返す刀で、エルドに雷撃波を飛ばすが、エルドは落ち着いて回避する。しかし、『最強の雷獣』、通称リクが高速でエルドの背後に回りこむと、その巨大な前足の爪を振るった。

しかし、エルドもさることながら、炎の盾を生み出して爪を受け止める。

《あっちい！！》

たまらず、リクは爪を引っ込める。

エルドはリクがひるんだ一瞬の隙を見逃さなかった。
刹那の間に空を埋め尽くすほどの様々な攻撃魔法を生み出し、それを一点に収束させる。

「『^{グングニル}神殺し』！」

全ての属性を無理なく統合させたその槍の色は漆黒。
神すら無に帰す混沌の象徴だ。

エルドは躊躇なくそれをニードに撃った。

《ヤベエ！ もっと生気をよこせ！》
「わかってる！」

焦りながらも、リクは自らの最強の盾をニードに持たせる。そして、
リクの体からあふれた光が盾の形を取るのと同じ時。

カッツカッツカッツ！！！！と凄まじい轟音が周囲に響いた。

盾は『^{グングニル}神殺し』の力を受け止めるのではなく受け流す。

『^{グングニル}神殺し』と盾が衝突した瞬間。ニードの周囲三メートルほどを覗いて辺り一帯が消し飛んだ。

「今ので四百人くらい死んだけど…」

「栄光への礎だ！」

「…ずいぶんな言い草だな」

盾に渡していた生気を全て刀に移動させる。能力を発生させるための生気は有限だが、同じ魔獣から生み出された魔獣外装ではその譲渡ができる。

ヂツヂツヂツ！！と刀の周囲を走る紫電が規則的に明滅する。
ニードはそれを大上段に振りかぶると、全ての力を一撃に込めた。

魔獣外装と呼ばれる武器は込められた力を使い切れれば砕けてしまうが、命を削れば生氣は生み出せる。

普通の魔法使い千人ならば一瞬で塵も残さず消し飛ばせるほどの力を、ニードはエルドではなく、魔道王のいる高台に向けた。

「な！？ やめろ！！」

ジャッジメント
「『雷王の裁き』！！！！」

エルドが焦った声を出すものの、ニードはためらわずに刀を振り切った。刀は砕けたが、キュアッ！と凝縮された一撃が高台に向かい、ニードの予想通り『左腕』^{シニストラ}の障壁がそれを受け止める。

が、リクの雷矢すらかき消した障壁も、『雷王の裁き』^{ジャッジメント}は受け止めるだけで精一杯だったようだ。

バキャンッ！ と障壁が砕け散る。

「リク！ 走れ！」

《オォ！！》

「待て！」

リクが矢のように駆け出す。

エルドは魔力を『神殺し』^{グングニル}に全て喰われ声を上げるしかできない。

ザッ…と、ニードは高台の上に降り立った。

「…こういうことか」

結論から言うと、高台の上にいたのは二人。

一人はベッドの上に横たわる瀕死の老人。もう一人は、その脇で倒れている白い布で全身を覆った女性だ。こちらは死んでいるだろう。それを見て、ニードは全てを悟る。

ただの魔法障壁で『雷王の裁き』^{ジャッジメント}が受け止められるはずがない。

その命を魔力に変換した最後の砦だったのだ。

「ゴホゴホッ…！ エルドは…どうした？」

「殺してはない。魔力は切れてるみたいだけど」

「そうか…。礼を言う」

「なんでだ？」

「エドラは私のために死んでしまった。エルドまで死ぬことはない」

「…俺はお前を殺す」

「わかってる…。だが…、その前にやるべきことがある！」

老人：魔道王は一喝すると、自らの胸に短剣を突き立てた。紋章が短剣の柄から現れ、光り始める。

ニードは止めようかと一瞬逡巡したが、世界を収めていた魔道王が成す最後の仕事だと思い、高台からエルドの元へ戻った。

「魔道王は死ぬなって言ってたよ」

「………糞ッ！」

悪態をつきながら涙を流すエルドに、ニードは言う。

「逃げなよ、今生き残ってる魔法使いは生かしておくから」

「…感謝する」

エルドは、一度だけ頭を下げると、他の魔法使いとともに去っていった。

ニードは、リク以外には死体しかない場所で、ポツリと呟く。

「こんな殺人鬼に、感謝なんかするなよ——」

《なんか言ったか？》

「なんでもない。行こうか、リク」

《ああ！ うまい飯が待ってる！》

「食べ過ぎるなよ？」

——黒い髪と翡翠色の瞳を持った青年が魔道王の死に際を見届けて六十年——

——魔獣家の育成に力を入れる名門、クレイグ家を作り、ニードは息を引き取った。しかし、主人が死ねばその魔獣も死ぬはずだが、リクと呼ばれる獅子はニードが死ぬ前にどこかへ消えたという——。

閑話 聖戦（後書き）

零話だったものを閑話として投稿しました汗

すみません汗

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9452y/>

最強の雷獣と落ちこぼれの魔獣使い

2011年12月2日16時35分発行